

この人に聞きたい インタビュースタッフ

男女共同参画専門委員であり鹿児島純心女子大学助教授 谷崎和代さんにメディア・アリテラシーについてお話を伺いました。



谷崎 和代さん

情報の伝達手段を意味するメディアは、単に事件や商品の情報を伝えるだけでなく、人々の潜在意識に働きかけ、感性を誘導します。メディアに描かれる類型的な女性像・男性像は、現実の写しではなく、女らしさ・男らしさの規範を人々の脳裏に刻み込むメッセージです。

例えば食用油のCMで、有名な女性タレントがエプロン姿で天ぷらを揚げていて、画面の奥では夫

らしきタレントが新聞を読んでいるという場合、CMを見た側の印象に残っているのは、女性タレントのエプロン姿ばかりで、商品名は忘れられていることさえあります。このようなCMはからずも、台所で料理するのは女性で、妻か母の記号としてエプロンをし、男性は食卓で新聞を広げながら出来るのを待ってあげないといいう、性別役割を教えているのです。メディアで繰り返されている何気ない隠れたメッセージは、知らず知らずのうちに私たちの認識を形成します。

数ヶ月前秋田の連続児童殺害事件は、連日テレビで報道されました。特にワイドショーの取り上げ方は極端で、今は飼っていてもいないのにウサギの毛が残っているような「掃除しない女」、プロパンガスの供給を止めてしまっている「料理しない女」、*ネグレクトやその他の虐待をする「育児しない女」が、これでもかこれでもかと流されていました。もし犯人が男性だったらここまで掃除・料理・子どもの世話をしないことが強調されたでしょうか。女というものは家庭的

で子どもに対して無私の優しさと慈愛に満ち溢れた存在であるべきであるという女性像が前提となつて、このような報道になったのでしょうか考えられません。

女性も多様で、家事が不得意であったり、子どもが好きでなかったりする人もいます。女性は生まれるがらにして母性本能があり自己犠牲もいとわず無償の愛を注ぐのは当然と考えられているふしがあります。我が子でも愛せない母親がいる実態を認めなければなりません。子育ては産みの母親にこそ最も適性が備わっており、その母の愛情を絶対的に崇高なものであるとしてきたこれまでの母性観は、母親たちの実態とかけ離れた幻想に過ぎないものであると専門家たちが明言していることを広く世の中に知らせる必要があります。

秋田の事件においても、虐待の可能性に気づいただけでその人たちが、児童虐待防止法に照らし合わせて、地域の福祉事務所や児童相談所に通告することにより、事件を未然に防ぐことができたのではないかといった視点で報道するほうがよほど現実在即した前向きな報道になったのではないかと思われまふ。「母性喪失」「母親失格」といった糾弾に終始するだけでは

なく、なぜ彼女が育児に挫折したのか、地域や周囲の人たちができることはなかったのか、原因を見極めようとする努力の必要を感じます。それが子育てに悩み苦しんでいる母親が多くいる現実を見据えた、真の子育て支援にもつながることだからです。

メディアから洪水のように流される情報を受け取るとき、メディアが設定した視点からのみ無批判に受け入れる危険性を認識することはとても重要です。ときとしてメディア内容は偏った女性観を人々に培養し、性別役割分業を再生産するからです。このようになるのは、メディア情報を送出する送り手たちに女性が圧倒的に少ないことが原因しています。しかも意思決定部門では絶対的に女性が少数派であるため、受け手女性のニーズを汲み上げていないばかりか、男女間の平等を推進し女性の多様なイメージを浸透させるための積極的な役割をメディアが果たしていない場合が多々あります。見ている側の私たちがしっかりとメディア・アリテラシーを持ち、問題を感じたらメディアに対して働きかけを行う、異議申し立てを行うということも必要だと思えます。

※ネグレクト：乳幼児に対する適切な養育を親が放棄すること。